# 伊那谷地名研究会通信

第108号

発行日　令和七年七月二七日
発　行　伊那谷地名研究会
事務所　〒三九九－二一〇二
長野県下伊那郡下條村陽皐七二〇八

「小字地名からムラの歴史をさぐる」
講師　伊那谷地名研究会　中島　正昭　会員

**定期総会・記念講演会に参加のみなさん**
（飯田市美術博物館講堂　令和７年６月15日）

## 伊那谷地名研究会
## 令和七年度定期総会を終えて

伊那谷地名研究会　会長　原　董

先般六月一五日（日）、飯田市美術博物館講堂に置きまして、令和七年度定期総会を、来賓に飯田市教育長熊谷邦千加氏、飯田市考古博物館館長下平博行氏をお迎えし、盛会に開催致しました。開催内容は「記念講演」そして、中心に『伊那谷地名研究会』発足二十五周年を大切に取り組み、総会の議事進行に置きましても、発足より今日までの活動を顧みますとともに何よりも、令和時代への取り組みを大切に意見交換を行いました。この中で大事な要旨は、会発足当初に刻まれた「会設立趣意書」の確認であります、それを示します。

**伊那谷地名研究会設立趣意書**

**地名は、人と土地の関わりによって生まれ人々共通の思いを土地に与えた言葉であり、土地と人々の心の通い路でもあります。そして地域の自然・歴史・民俗・文化を今に伝えてくれます。私たちの先祖は、遠い昔から伊那谷を切り拓き土地を耕し生活をいとなみ、共に地域社会を築いて来ました。伊那谷の地名は、そうした人々のくらしの中から発生し、今も使われている祖先と私たちの心をつなぐ貴重な文化遺産なのです。しかし昨今、地名が忘れられ、地名に寄せる人々の感覚も希薄になりつつあります。そこで私たちは、地名研究の重要性を認識する中で、新たな視点から「伊那谷地名研究会」を設立するものであります。**

**この会は、地名を見つめ直し、地域を正しく理解することを目的とします。そして、諸先輩の業績を継承しつつ、地名を正しく後世に伝え地域を学ぶ後継者を育成することを目指します。**

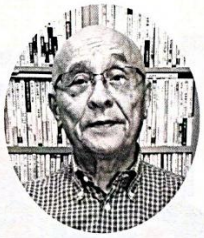
**平成十三年十一月二十三日　「伊那谷地名研究会」発起人会**

『設立趣意書』を顧みますと、令和時代の活動の取り組みに寄せる心を、改めて大切に感じます。伊那谷地名研究会の会員とともに、これまで連携を戴いて来ました行政関係機関・広報機関・地域研究団体と『設立趣意書』を交わし合い、令和時代の活動に繋げたいです。

令和七年度定総記念講演報告（令和7年7月15日）

# 小字地名から ムラの歴史をさぐる

会員　中島正韶



## はじめに

地名には、その地の歴史が刻み込まれ、大地への命名には人びとの生活の根幹にある自然観・生命観・他界観が潜んでいる。ここに迫るところに、歴史学や民俗学等を含む総合的「地名学」の着地点があると思う。地名はその地の履歴書・重要文化財・文化遺産であり、日用品である。私たちは地名の意味や由来の研究に留まらず、地名周辺の地名群から、その地域の開発の姿、産業の興亡、隣接地域との抗争や協調、信仰や習俗伝承の継承の姿など、ムラの歴史、人びとの生活の歩みの生活誌、地域史の再構築に努めてきた。大地（地名）からの視点で、地域史の通説と異なるところや地域史の叙述の欠落部分が見えてくる。地名史資料、地名に関わる民俗伝承、その地名とともに生きる生活者の「語り」などの非文字資料から、地域史を再構築したいと試みてきた。私はこれを「地名歴史学」と呼んでいる。

## 南裏町の島地家「常盤の松」

『下伊那郡誌資料（島地五六）』（一九七七）の記載である。文中の括弧内、傍線・強調は中島。（島地）五六生れし年、（父鎌次郎）不幸にして腸室扶斯（チフス）に罹り、遂に安政三年（1856）十月、二十七歳を以て易籍す。これより十一歳迄、五六は母及び祖父（宥左衛門・改五六）の手によりて鞠育せられしなりき。

當時、邸は南裏町（現常盤町）に在り。邸内の一老松、常盤の松のあり。徑一丈に餘り（3㍍余）ありしが、後之を伐切したるに切口四疊半（273㌢×273㌢）に餘れりと。維新（1868）となりて後、常盤町と称したるは、全く此松に因みしものなり。戦地なる（安東）貞美（台湾総督・陸軍大将）へ飯田より（安東喜久）（島地五六の父鎌次郎の姉、安東辰武の後妻、島地宥左衛門の三女で菊子ともいう。安東貞美の母）（貞美の兄直平は柳田家養子となり、柳田東助の娘琴と結婚し、四女の孝子が養子となる樋口國男と結婚）（安東辰武の子欽一郎の娘伊佐子は北原阿智之助の妻、阿智之助は稲雄の次男で上郷黒田張原の同族北原家へ養子・痴山）

常盤町　名さへなつかし　我すみし
軒端の松の　名残りと思へば

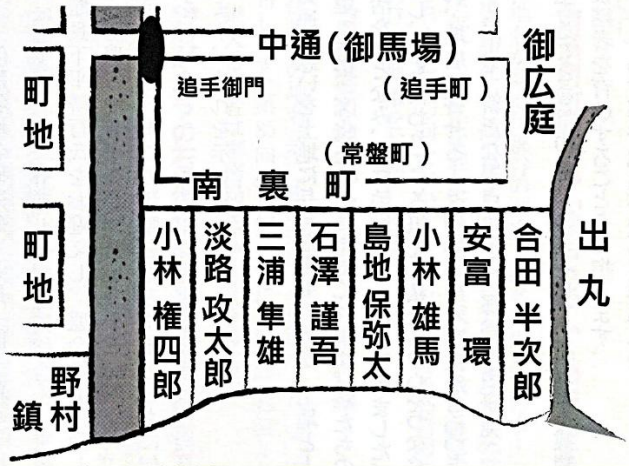
『思ひ出草』安東菊子（翻刻　飯田市美術博物館）（二〇一二）に菊子（喜久）の歌がある。

長姫城懐古

石垣も　堀もあとなく　なりぬれと
おもかげにたつ　長姫の城

うれしさを　色にも見せて　君たちを
松こそ庭の　あるじなりけり

南裏屋敷住人の石澤謹吾は藩家老、藩主親義の突然隠居の「不容易大事件」の鍵を握る人物であり、士族「協同社」の創業者だ。島地保弥太は上飯田学校長、弟の二代目五六は飯田中学初代校長である。南裏町から常盤町への飯田町近代史に登場する人びとの姿から、城郭破却や士族らの社会参画の実際、幕末御一新のこのエリアならではの展開に注目してみたい。




長野県立歴史館蔵「元飯田城外郭他開墾願ノ部」より江下以知子作成
中島改作

## 飯田町都市計画と士族と長姫橋

飯田藩は天狗党との戦闘を避け、幕府の方針に逆らい、飯田城下を戦乱焼失から守り抜く賢明な選択をした。

明治御一新のなかで、旧藩士らは外堀を含む飯田城郭払下げを受け、この用地をもとに創業した授産組織「協同社」（協同合資会社）を運営する。協同社は士族の救済と城下町の都市計

画事業に参画する。中核は飯田県大参事石澤謹吾（家老）である。堀を埋め立てて新しい市街地を形成したり、橋南と橋北と城下二分の「**谷川橋**」を石橋に改良し「**長姫橋**」と命名（一八七八）したりと、公共工事に協力して資材・資金・労力を提供している。

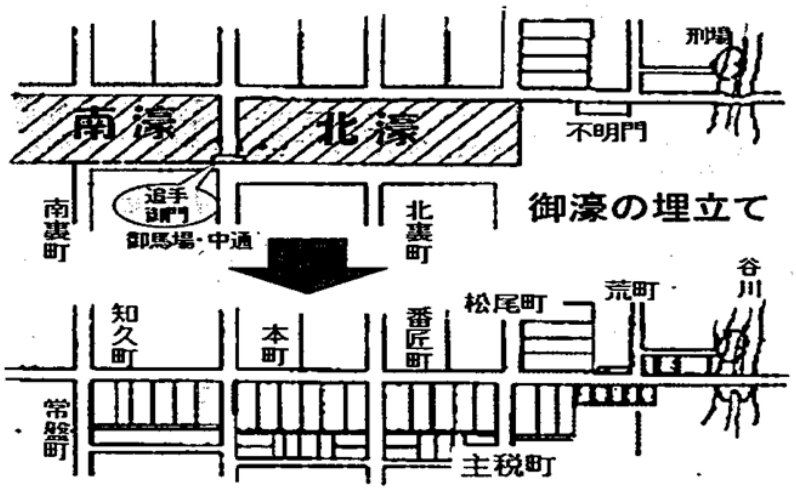
長姫橋は、田総元治（士族・飯田県少参事）今村善吾・真幸（座光寺豪農）野原（豪商）奥村（中馬問屋）ら士農商の有力者が身分を越えて協力している。施工には身元の確かな村落のもの（上郷・座光寺）が当たった。士族授産協同社は寄付金も拠出し、払下げの開墾地の長姫城の石・真砂を供出したため、新橋はまさに資材費はゼロで成った。橋名が谷川橋から正式に長姫橋へ改称の由縁である。

飯田大火（一九四七）後「**めがね橋**」となり、飯田町の近世と近代の経済史を物語る象徴的な歴史地名である「谷川橋」と「長姫橋」は人々の記憶から消し去られた。

## 堀端通りと銀座

長姫城の南濠と北濠が士族に払下げられ、埋め立てられ、三の丸の**南裏町**は「**常盤町**」**中通**（**御馬場**）は「**追手町**」**北裏町**は「**主税町**」となった。「**堀端・堀端通り**」は「**広小路**」（一八九七）から「**飯田銀座**」（一九三〇）へ、そして「**銀座**」（一九五二）となった。

飯田藩時代の文化・物流拠点の飯田再現を願い、中京や東京経済圏への熱い眼差しが「広小路」「銀座」の名乗りとなった。堀や土塁を潰すなど旧城を破却し、新しい商店街や道路網構築の新時代へ呼応が、旧藩士らの組織的な関わりのなかで進められた。



飯田長姫城の南北濠の埋め立て前の三の丸

全国には五〇〇余の銀座商店街がある。地名学では「あやかり地名・ブランド地名・ニセ地名」という。繁華街をいう俗称銀座ではなく、正式な町地名としての銀座は全国に一八銀座のみで、飯田市銀座は全国で一番早い昭和二七年（一九五二）に誕生している。

一九六七年、都はるみ（唄）・米川柳二（詞）・市川昭介（曲）の「飯田銀座音頭」を発表するなどの「飯田堀端百年記念祭」を盛大に催している。

♪リンゴ並木に花咲く飯田　雪の赤石　情けでとける　銀座よい街　ホントダニ　昔ほ**りばた**　**広小路**　ハットヨイコラ　ヨイコラセ
**今は銀座**にゃ　夢がある♪

東京の「明治百年・大銀座まつり」はその翌年の一九六八年である。こんなところにも飯田銀座町衆の心意気が感じられる。

東京のホンモノ「銀座」（新両替町・一丁目～四丁目）も、今では八丁目、西銀座や銀座東となり、当初の約一二倍があやかり地名だ。「どこが銀座だ！」の声が聴こえる。長姫城と城下町飯田の痕跡は薄れてきてはいるが、地名のなかには脈々と生き続けている。町名の由来を尋ね、来し方を振返りながら、ひたすらなる地域づくり地域磨きを念ずるばかりである。

## おわりに

長姫城の破却にともなう明治当初の町づくり史について、地名からの探りを試みてみた。濠埋め立ての主因は何か。堀端はなぜ広小路・銀座と称したか。町名改廃に抵抗はなかったか。新町名に託す思いや願いは。銀座呼称への銀座内外の人々の賛否は。旧町名の保存や活用の動きは。ここで記す余裕はない。小字から歴史をひも解き叙述する営みを更に続けたい。紙面都合で飯沼郷関係は割愛した。『上郷飯沼の民俗』（地名調査報告　岡田正彦・中島正韶　２０２４　飯田市美術博物館）をご覧頂けば幸いです。

（日本地名研究所員　飯田市上郷黒田在住）

## 第85回研究発表例会開催について（通知）

第八五回研究発表例会を左記の通り開催します。つきましては、万障一排にてご出席くださいますようお願いします。あわせて、会員外の友人知人等々お誘いあわせてご参加賜れば幸いです。

# 『城郭地名に学ぶ
## ―吉岡城址の歴史と地名―』

発表者　原　　董　会員

**日　時　八月三一日(日)午後一時三〇分**

**会　場　飯田市美術博物館　講堂**

### 発表の要旨

「城郭地名」は、中世に築かれ地域を守り、今に伝える城・砦の存在を示す大切な歴史資料です。

飯田・下伊那地域には一四〇を超える城郭跡が大切に伝えられそこには、築城当初に刻まれた城郭共通の地名を伝え遺しています。その地名を繙き学ぶことで、その地域を守った城郭と城の構造が読み解ける資料です。

「**吉岡城**」が築かれた歴史は、室町時代の応仁の乱に始まる、松本小笠原氏と松尾小笠原氏の同族争いにより、松本小笠原氏の指令で、文明四年(一四七二)、松尾小笠原戦力に対峙するために築かれた城で、城主は松本小笠原氏の分流「下條氏」が七代、一二〇年間、伊那谷に君臨した城です。

城郭は、周辺の河川による谷地形を活かした広範な「平山城」で、築かれた当時の城郭構造全体と地名を今に伝え遺している貴重な城址です。そして、そこに刻まれる地名は、築城当時より人々の日常生活の「言葉」として伝え、現在も使われている歴史資料です。

その城郭地名の主要を示しますと、**出曲輪・殿郭・本城・二郭・桝形・三曲輪・屋敷町・大手・馬出・竪町・横町・馬場**跡などが遺され伝えております。

では、吉岡城がこのように遺された歴史の背景は、歴代城主が、小笠原氏・武田氏・織田氏・徳川氏支配と有効に関わり、伊那郡の有力領主として活動するとともに、地域開発と、歴史・文化を大切に伝えた資料が遺ります。吉岡城がなぜこのように遺されたのか、歴史の概要を次に示します。

室町より戦国時代へ、松本小笠原氏勢力の分轄として活動する中で、時代は武田信玄支配に移行します。そして信玄は京都上洛を目指し、下條氏に三河攻略を命じ下條氏は三河を攻め、一日に三つの城を支配し、武田信玄の三河攻略を開いたことにより、信玄は、下條氏に「感状書」を送り戦功を讃え、吉岡城主下條信氏に自分の妹を妻に送り血縁を結んだ。これは、下條氏と吉岡城温存に繋がった歴史です。しかし天正元年一五七三信玄は浪合で病没するが、この間下條信氏は、信玄の使者として徳川家康と繋がり、その重臣石川数正・酒井忠次・本田正信・大久保長安等と親交を深め、徳川家康による「下條氏と吉岡城温存」に繋がっている歴史です。

それは、天正一〇年甲斐の武田家が滅亡すると下條氏は、徳川家康支配へ、家康は吉岡城を伊那谷支配の拠点の城とした。しかし天正一五年、豊臣政権による信濃国支配となり、下條氏は越後へ領地替えとなり吉岡城は飯田城の「支城」として活用されます。そして慶長八年(一六〇八)徳川幕府誕生により家康は、下條氏一族を御三家並びに大名家に仕官を宛がい温存されます。

そして吉岡城は、伊那谷に定めた『幕府領』の役所所在として活用し、明治維新までづいたことにより、吉岡城址は城下町も温存、居住住民とともに城郭を刻む大小の地名も、現在に伝えられている大切な歴史です。

### ◇南信州新聞連載「地名コラム」の執筆を！

「地名が語る伊那谷の歴史―地名は生きている―」南信州新聞社のご協力による平成一七年一月よりの掲載は本年で二一年を迎えます。毎月三回掲載を継続、今日までに七四〇回をむかえます。引き続き、会員の皆さんのコラム執筆をお願いします。

### ◇『伊那谷の地名』第3輯　一八〇〇円

『伊那谷の地名』第三輯の残部、会員には一八〇〇円で頒布します。第85回研究例会日に会場にてお渡しします。購入希望者は事務局までご連絡ください。

### ◇『わがムラの石造文化財』第3集（新刊）

南信州文化財の会発刊の石造文化財シリーズ最終巻、二二〇〇円。購入希望者は事務局へご連絡ください

### ◇運営委員会を開催します（8月31日）

来る8月31日の研究例会終了後に、同会場にて30分以内での会議をお願いします。

### ◇令和7年度年会費　二〇〇〇円

年会費未納の方、振込まれるか、研究例会の折りに持参ください。

会計　佐々木行博

事務局　中島正韶〒395-0004 飯田市上郷黒田 1977
nakajimoya2@clock.ocn.ne.jp TEL 0265(24)0135
http://inadani-kenkyo.com/inadanichimeiken